

そらうがく

(No. 75)

R5. 12. 18 発行

現職研修委員会

総合的な学習部編集



夏季研修報告

授業力・教師力アップセミナー(基礎編)

基礎編には、十九名の先生が参加されました。

研修①では、竜海中学校・武井翔先生から、「主体的・協働的に探究し、新たな価値を創造する楽しさを実感できる生徒の育成」というテーマで実践発表をしていただきました。地域や他教科との連携を図った単元計画、生徒の学びを深める追究、ゲストティーチャーの活用などの手だてにより、生徒が相手意識をもってアイデアを行動に移していました。

研修②では、教育研究論文の書き方を、指導員の酒井智之先生より詳しく教えていただきました。

研修③では、グループワークシヨップにて、一学期実践の振り返りと、年間指導計画の見直しについて、意見交換が行われました。

授業力・教師力アップセミナー(専門編)

専門編には、十二名の先生が参加されました。

研修①では、中京大学・久野弘幸教授から、「令和の日本型教育と総合的な学習」というテーマでご講演いただきました。今、注目される「個別最適な学び」の根幹にある「自由進度学習」について、すでに取り組んでいる学校を例に挙げ、今後求められる学びの姿についてご教授いただきました。

研修②では、福岡小学校・藏田和馬先生の授業実践をもとに、目指す子どもの姿に迫るための代案の立て方について、チームに分かれてディスカッションをしました。活発な議論が行われました。

総合的な学習におけるチーム学習

総合的な学習部長 川本 祐二

「もっと詳しく調べた方がよくない?」「考えはいけど、実際にやるだけの時間はないよね」などの意見が、どのチームでも熱心に交わされる。チーム内で「伝え合いたい」という雰囲気醸成されており、取り残されている子は見られなかった。十一月一日、六ツ美北部小学校の研究発表会、六年三組、西村文利教諭の総合的な学習の授業風景である。

教師の指示は最小限。「よつば」の一言だけで、子供たちは「よつば学習」での話し合いに入り込む。その間、教師はチーム間を巡りながら端的な言葉で子供の活動を称賛し、価値付けていく。その数二十回以上。全体への気付きを促す場合は、一度全体を止め、意図的に指名したチームに発表させて考え方を共有し、すぐに再開する。このような教師の出によって、各チームの学びが段階的に深まっていく。各チームの話し合いの結果は、ホワイトボードに色分けや矢印を効果的に用いて可視化され、全体共有の場で発表や伝達のツールとして活用される。

西村教諭に今回の実践を通じて得られた手ごたえについてお聞きした。その中で見えてきた「よつば学習」(チーム学習)の効果について整理してみた。

① 総合的な学習とチーム学習との親和性

答えが一つではない課題を解決していく過程で、共に解決方法を考えるチーム学習が適している。また、課題設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現の探究のサイクルを協働的に行うことができる。

② 教科学習への効果の波及

自分たちなりの答えを生み出していく活動の中で、チーム内での関わりが深まり、活発な意見交換ができるようになる。自分の考えを表明できる安心感を基盤に、各教科でも自由に発言できるようになる。

③ 「学び方」を身に付けていく場

チーム内で「意見をつなげる」「優先順位を考える」「合意形成をする」「比較検討をする」等の基本となる学び方の経験を積み重ねていく機会となる。

ポイントとなるのは、総合的な学習では、「正解」を意識し過ぎることなく、自由に考えを表明できる点である。互いの考えのよさを受容する中でチームの輪が形成されていく。さらに、西村教諭は教師のファシリテートとして、「つなげる」というキーワードを挙げている。子供同士の意見をつないでいくことよって、主体的に話し合い、意欲的に課題解決へと向かうチームに成長していく。総合的な学習が核となってチーム学習の基盤が作られ、教科学習へと広がっていく可能性を確認することができた。

県教研の報告

十月二十一日に、第七十三次教育研究愛知県集会在開催されました。岡崎の代表として、野村祥太先生(羽根小)と藤渕俊旭先生(新香山中)が参加し、協議の視点に沿って積極的に討論を行いました。

助言者の愛知淑徳大学・加藤智准教授からは、単元構成や指導計画の評価と改善を前年度末に行い、次年度に引き継ぐことが大切であること。また、子どもたちに探究の流れや評価規準を提示して意識させたり、子どもたちの声をもとに単元計画を修正したりしていくことも効果的であると、助言をいただきました。

羽根小学校 野村 祥太

「台湾交流を通して、自他の考えや思いを大切にし、主体的に活動に取り組む児童の育成」を主題とした実践について発表しました。児童主体の活動を進めるために、ゲストティーチャーや書籍などの手だてをどのように活用すべきか議論を深めました。

助言者の先生からは、「学びのサイクルに沿って掲示物を作成する」という、本実践をさらに良い方向に導くご助言をいただきました。

新香山中学校 藤渕 俊旭

県教研では、「ESDの六つの視点で働きかけ、持続可能な社会を創ろうとする生徒の育成」を主題として発表しました。エネルギー使用量の削減について自分事として捉え、節電という形で社会に働きかける生徒の姿を提案しました。

また、「探究的な学習を実現するために教員に求められること」というテーマで討論が行われ、題材や単元設定の工夫、生徒を信じて待つ教師の姿勢も大切だという意見が出されました。教師の学ばせたいことを生徒のやりたいことに変える手だてを講じることや、振り返りから成長を認めていくことで、生徒の意欲を生かして活動を進められると、助言をいただきました。

学び舎の 総合耳寄り情報

五年生が校内にある田んぼである「井田んぼ」の未来を守るために、何をすべきかを検討しました。子どもたちの考えから、「四年生に、井田んぼに関する知識や伝統を伝えたい」と、目標を設定することができました。実際に米作りをした経験と集めた知識を、四年生にどのように伝えるべきか整理することができました。井田小 柴田 拓磨



翔南中の二年生は、市役所の「男女共同参画出前講座」を受けて、性別で固まった考え方にとらわれないことが大切だと学びました。男性の保育士さんや女性の消防士さんから、仕事に就くきっかけややりがい、苦勞などを直接聞くことよって、思えばいさえあればどんな職業にも就くことができることを知りました。生徒は、自分の好きなことや興味のあることを探していきたいという思いを深めることができました。翔南中 高津 健



本校の一年生は、通学区域内の東部地域福祉センターの訪問や岡崎特別支援学校との交流会を通して、「福祉」について学習しています。施設内の様々な工夫や携わる人々の思いに触れることで、「みんなが幸せに暮らせる社会をつくるために自分たちができること」を、一人ひとりが考え始めるよい機会となりました。東海中 手島 萌乃



本校の五年生は、毎年小久井農場さんの水田をお借りして、米作り体験を行っています。五月末、泥んこになりながら、子供たちは楽しそうに田植えを行いました。そして秋に稲刈りを終え、収穫したお米を山の学習でいただきました。今年も、米づくりの感動体験を通して、農家の方々の苦勞や米作りに対する思いを実感することができました。小豆坂小 林 好志



五年生は、「障がいのある方について考えよう」をテーマとして、福祉について学んでいます。一学期は、目や耳の不自由な方について学習しました。まず、疑似体験や図書資料を活用して調べ学習を行いました。次に講師の方からお話を伺い、その方たちの生活の様子や気持ちを知りました。二学期は、校内で車いすに乗ることや介助する体験をしました。これらの学習を通し、子どもたちは、「心のバリアフリー」を広げていくことの大切さに気付き、自分から積極的に障がいのある方に関わっていきたいという思いをもつことができました。三島小 鶴田 秀幸

